

「せとうち発見の道」企画展

「瀬戸内市の宝 もうひとつの“トウケン”（陶硯）」

～古代の役所や寺院で使われた寒風窯の円面硯～」

2022年11月29日（火）～2023年2月26日（日）

瀬戸内市民図書館

牛窓町長浜の寒風古窯跡群（国指定史跡）は、7世紀の飛鳥時代に須恵器を焼いた窯跡です。ここで製作されたものの中に、役所などで使われた陶製の硯があります。当時の硯は、円形で、墨をする硯面の下に台脚を付けた「円面硯」と呼ばれるものが主でした。寒風窯では、どのような円面硯が製作されていたのか、奈良の都や寺院にも運ばれたという、寒風産の須恵器や円面硯の魅力を再発見します。



寒風古窯跡群（牛窓町長浜・国指定史跡）

◆陶硯（とうけん）について

古来中国では、文人が文字によって意思や伝達、記録を書き残す文房具の4種として墨・筆・硯・紙を「文房四宝」として珍重してきました。

現在、墨をする時に使用する硯の多くは四角い形をした石の硯「石硯」を使用しています。ところが、漢字が中国から日本へ伝わるとともに硯が導入された古代の飛鳥時代（7世紀前半）から平安時代（11世紀中頃）までは、ロクロ技術を利用し、墨をすることに耐える硬さをもつ須恵質の焼き物による硯「陶硯」が一般的でした。陶硯が主流だったのは、古代東アジアのなかでも日本だけでした。

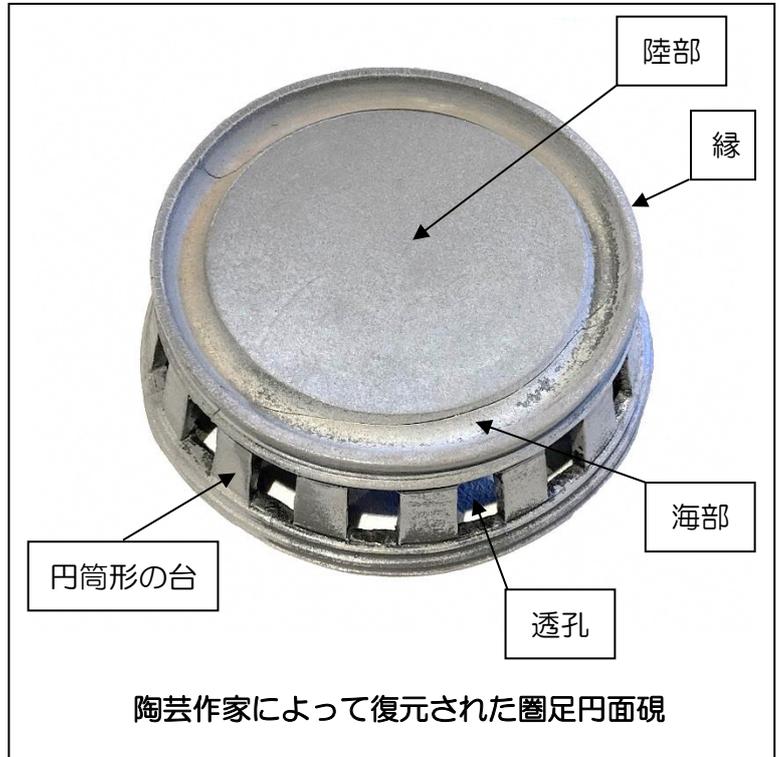
◆円面硯（えんめんけん）について

陶硯には硯として専用につくった「定形硯^{ていけいけん}」と食器や甕^{かめ}の破片などを硯に転用した「転用硯^{てんようけん}」があります。

「定形硯」は、「円面硯^{えんめんけん}」「円形硯^{えんけいけん}」「宝珠硯^{ほうじゆけん}」「風字硯^{ふうじけん}」「形象硯^{けいしやうけん}」の大きく5つに分類されています。大半を占めるのは丸い形をした「円面硯」です。

中央の盛り上がった部分で墨をすり、筆先を整えるのが「陸部^{おかぶ}」、陸の周りのくぼんだ部分に墨を溜める「海部^{かいぶ}」、海部の外側に縁をめぐらせています。

円面硯はさらに、硯の下に付けられた脚により、①硯の周囲に動物の脚を模した台を付けた蹄脚円面硯^{ていきやく}、②透穴が入った末広りの円筒形の台を付けた圈足円面硯^{けんそく}、③獣の脚を付けた獣脚円面硯^{じゅうきやく}、④杯の上部を塞ぎ硯面とし把手が付く中空円面硯^{ちゆうくう}、⑤硯面のみの無脚円面硯^{むきやく}に分類されます。①・②が大半を占めて出土しています。



◆圈足円面硯（けんそくえんめんけん）

牛窓町長浜にある寒風古窯跡群では、1-I号窯と2号窯の2基の窯から円面硯の破片が21点出土しています。円面硯の中でもほとんどが圈足円面硯と分類される硯です。

形態として、墨をする硯面（陸部）が円形の中央にあり、周りに墨を溜める海部を持つ

もので、硯面の下に透穴が入った末広りの円筒形の台脚を付けたタイプです。台脚の透孔はほとんどが長方形ですが、長方形の上部がさらに方形に切り込まれたものもあります。

寒風窯の圈足円面硯は、透孔の上下に装飾の小さな三角形の帯を巡らせる特徴が認められます。他の遺跡や寺院跡から出土した圈足円面硯を寒風窯産と認定する指標になるかもしれません。



円面硯と寒風古窯跡群について

約 1,300 年前の飛鳥時代後半に須恵器生産が行われた寒風古窯跡群から円面硯と共に、古代寺院の屋根の両端に飾られる鴟尾（しび）が多く出土しています。これらの品々は寒風窯の性格を考える上でも重要です。

政治的・文化的色合いの濃い品々の一つ円面硯は、文字を頻繁に使用する宮都のような社会的中心地に供給されていたと考えられ、古代の重要な窯業地としての存在が際立っています。このことから、寒風窯は供給範囲に限られる単なる地方窯というよりは古代の都や寺院との関わりがあった須恵器窯と評価することができます。

◆中空円面硯（ちゅうくうえんめんけん）の亀型把手（かめがたとして）

飛鳥時代後半（約 1300 年前）牛窓町長浜・寒風古窯跡群

2022 年 2 月に、寒風古窯跡群の地表面で、邑久小学校の男子児童が発見した中空円面硯の亀型把手（長さ約 6cm）です。寒風古窯跡群では、鳥型把手は見つかっていましたが、亀型把手は初めての発見です。それをもとに、陶芸作家が中空円面硯を復元しました。



新発見となった中空円面硯の亀型把手



復元された中空円面硯（亀型把手）

◆中空円面硯の鳥型把手（とりがたとして）

飛鳥時代後半（約 1300 年前）牛窓町長浜・寒風古窯跡群



寒風古窯跡群出土の
鳥型把手



寒風古窯跡群出土の鳥型把手



復元された
中空円面硯（鳥型把手）

◆**獸脚硯**（じゅうきゃくけん）（**形象硯**）

奈良時代前半（8世紀）

瀬戸内市内出土

瀬戸内市内出土の硯として旧邑久考古館へ早くから収蔵されていた資料です。大きさは、残存最大長 15.6 cm、最大高 6.8 cm、最大幅 7.7 cm。硯面は楕円形を呈します。

硯面の下には 4 つの脚が付けられていると推定されますが、現存するのは 2 か所です。脚はいわゆる獸脚で、下端前部にしばしば表現される指は省略されています。海部側の脚は陸部側より高く、硯面を傾斜させる特徴があります。また、硯面の堤は宝珠硯にみられるような花卉状の割り込みをもっています。硯面の陸部には、陶硯特有の滑らかな使用痕跡は認められず、窯跡から出土した可能性も十分考えられます。



◆**形象硯**（けいしょうけん）の脚部

飛鳥時代後半（約 1300 年前）



寒風古窯跡群出土
形象硯の脚部
（牛の蹄（ひづめ）を表現）



瀬戸内市内出土
形象硯の脚部
（指を表現）



瀬戸内市内出土
形象硯の脚部

陶硯の出土から分かること

陶硯は、生産地である一部の須恵器窯を除き、古代の宮都のあった奈良の藤原京、平城京や京都の平安京をはじめ、寺院跡や地方の役所跡からの出土がほとんどです。

古代において漢字を読み書きできたのは貴族や役人、僧侶にほぼ限られていたと考えられていることから、国を統治する行政機関の中で文書や帳簿づくりの文書行政や寺院での写経などに使われていたことを示す良好な資料といえます。

古代の役人が所属する役所で机に向かい硯で墨をすり、筆を持ちデスクワークに勤しむ姿がうかがわれます。